

# 未だ野

すぐろの

800号記念特集号

4月号（通巻800号）



## 八〇〇号を迎えて

小川玉泉

昭和二十一年四月の創刊より本号まで六十七年、月数にして八〇四か月。刊行した末黒野誌数で八〇〇号を迎える。月数と号数の違いは休刊である。それにしても、現在まで続いていることは、歴代の主宰はじめ編集部のなみなみならぬ努力と、それを支えてこられた会員の方々の絶大な協力があつてのことである。これからの末黒野を支えるのは七十代の人々である。しかし、当会の年齢構成を見ても確実に条件を満たせるかと問えば、答えは否である。俳壇全体を見てもどの結社も苦労をされている。角川の「俳句年鑑二〇一三年版」の編集後記によれば「飯田蛇笏・龍太の流れを汲む「白露」が終刊、俳壇に大きな衝撃が走りました。加えて高

齡化による俳句人口の減少、若手の結社離れ等の問題はますます深刻に。過去の俳句年鑑を繙くと、かつて八〇〇誌を超えていた俳誌数も二〇〇六年版の八三五誌をピークに、一〇年版では七九〇誌、今年一三年版の掲載は七一六誌となりました。〽とあり直近三年間に七四誌が廃刊になっている。こうした現実をふまえ、末黒野の皆さんが俳句の楽しさを味わえるような運営を図り、仲間意識を持って、手をつないでいきたいと願っている。

その一番の原動力は長年にわたって培われた「和」の精神である。俳句は衆の文芸であると同時に個の文芸でもある。日本の風土に根差した心の深いところの自然への感謝の表現でもある。末黒野が次の世代へと受け継がれるように、皆さんの英知を借りて、さらに七十周年へ向けて進んで行くことを強く願っている。

# 大花野

石黒興平

浅春や水動かさず動く鯉  
砲口に蓋せし三笠のどかなり  
春くや蛙合戦なほ止まらず  
石庭や無心になれぬ花の昼  
波に腰打たれ鋤簾の浅蜷取  
姫垣の固き棕櫚縄白牡丹  
ほうたるやいつしか水の音更けぬ  
木道の鋸錆びぬ水芭蕉

些事を気に大事忘るる暑さかな  
揉みに揉み人の輪崩す大神輿  
艦橋に佇つやわきたつ雲の峰  
桴さばき汗また汗の男振り  
この美花に烏瓜とは誰がつけし  
神鷄の太き蹴爪や秋暑し  
外道なる釣果またよし裂膾  
妻またも歩をとめてをり大花野  
秋麗や往昔確と関所跡  
一片の魅に総崩れ鴨の陣  
据ゑられて解体シヨーの大鮪  
茫々の闇に溶け込み除夜の鐘

努力賞受賞作品抄

# 憲法記念日

今泉あさ子

宮鳩の羽音身近かに春立てり

切幣の春の光や地鎮祭

春昼やのどを鳴らして膝の猫

ゆくりなく御忌の人出や増上寺

憲法記念日長子手馴るる厨事

努力賞受賞作品抄

# 鳥渡る

太田良一

体内に世界地図持ち鳥渡る  
本閉ぢて虫の音近くなりけり  
人はみな沖に眼を向け冬帽子  
食積や絆創膏の母の指  
帰郷せぬ子の名を書けり祝箸

努力賞受賞作品抄

# 若竹の空

小山直子

春  
灯  
夫  
の  
遺  
せ  
る  
辞  
書  
を  
引  
く

潮  
の  
香  
は  
若  
狭  
ほ  
ぐ  
せ  
る  
蒸  
蝶

揚  
雲  
雀  
声  
を  
残  
し  
て  
日  
に  
紛  
る

い  
つ  
ま  
ま  
で  
も  
夕  
日  
放  
さ  
ぬ  
山  
桜

若  
竹  
の  
日  
の  
斑  
の  
あ  
そ  
ぶ  
足  
湯  
か  
な



努力賞受賞作品抄

# 汗手貫

小山ほ子

夕さりの竹林鳴らす春北風  
筆築の音色聴きをり花の道  
此の朝も一ト葉ほぐれぬ牡丹の芽  
合掌の法衣に覗き汗手貫  
弓檜古終へて一息新茶汲む

努力賞受賞作品抄

# 柿落葉

外山節子

新蕎麦や四峰のみ見ゆ八ヶ岳

身に入むや顔なき土偶乳房持つ

ドレミファと踏めば鳴るなり柿落葉

たつぷりとパンにジャム塗る四日かな

大寒のぴりつと痛きドアのノブ

努力賞受賞作品抄

棚田

橋場美篤

豊漁の節回しのせ雁渡し

夕映えの棚田ふちどり彼岸花

足音にあぎとふ鯉や水の秋

携帯に撮る彩雲や山眠り

声の艶変はらず夫の初詩吟

新人賞受賞作品抄

灸花

小倉純

放射能なしと春箒売る農夫

母野手の子等の野球や八重桜

黒揚羽谷の暗さを抜けにけり

梅雨晴間総展帆に挑む女子

オブリジェめく枯木賑はし灸花

新人賞受賞作品抄

# 道の駅

塚越弥栄子

かなかなや喉潤する道の駅

暮れてなほ芒明りや多摩河原

ゆきずりの吾も言祝ぐ七五三

葉牡丹の渦の幾重の深さかな

ひと筋の日差しに集ふ寒雀

新人賞受賞作品抄

# 残る秋

外山生子

菖蒲田は名札ばかりや残る秋

堰落つる水の勢へり溪紅葉

茶の花の白さを薄き日の包む

潮の香や枯菊に日の落ちかかり

夕時雨行き交ふ人の背の硬く

新人賞受賞作品抄

# 初御空

和田慈子

冬ぬくし牛の齢む小屋の闇  
切り岸の鳥の目動く冬旱  
冬木の芽少年の背のまた伸びて  
池の面に日矢一闪の初明り  
急磴を登り切つたり初御空

# 流灯会

齊藤マキ子

軒低き漁師の町や夏つばめ  
鯉跳ねて潮の満ちくる河口堰  
船名で呼び合うて酌む冷やし酒  
夏草や臼杵城址の翁句碑  
同じ名の多き家系凶虫払  
夜どほしの昔話や蚊遣香  
弓なりに灯る浦曲の星まつり  
人寄れば井戸より上ぐる大西瓜



邂逅のひと日賑はふ盆の月  
亡き姉の植ゑし桔梗供華とせり  
漆黒の海へあかあか門火焚く  
漁火の今日は消えをり流灯会  
よそ者として聞く里の踊り唄  
海霧深し出船の汽笛くぐもれり  
秋汐の香に暮れゆきぬ厨土間  
天窓の棧を洩れくる月明かり  
校庭に草食む山羊やうろこ雲  
舟小屋の石置く屋根や赤とんぼ  
苞とせむ古里の名の今年酒  
残照の豊後水道鳥渡る

年間優秀賞（平成二十四年）

乙矢集

優秀賞

おくれ来て小さく使ふ秋扇

松田 泰子

青炎集

優秀賞

銭洗ふ風より水のあたたかき

川村 亘子

耕土集

優秀賞

軍港の軍艦色にしぐれけり

正谷 民夫

◆特別作品年間優秀賞作品（平成二十四年）

優 秀 賞

春 近 し

前川美智子

探梅や小道の果ての村社

文を読む障子明りのやはらかく

老梅の冬芽ふくらむ日和かな

おだやかな冬日水面に鷺の影

せせらぎの音軽やかや春近し

冬木瓜の蕾ほぐれぬ二三輪

冬萌の岸や野川のさざめける

冬晴や梢あかるき雑木山

三尺に満たぬ小橋や日脚伸び

山野草の名札新し春を待つ

寒  
満  
月

小川玉泉

風に身を細め門松飾りけり  
立ち枯れの斑入数珠玉艶褪せず  
人日は母の命日粥供ふ  
初雪や人よりも鳥騒ぎをり

雷鳴のひと声混じり雪止まず  
初雪の埋め残せる野川かな  
寒厳し強風をつく救急車  
根方まで寒の日差しを大櫓  
金魚池寒満月の身じろがず  
せせらぎの日差しを捉へ寒の芹  
忽と風生まれ窓打つ寒日和  
愛の鐘ゆつくり流れ日脚伸ぶ

# お手付き

松本三千夫

氏神の礎に躓く初詣  
恵方道風固けれど海晴れて  
お手付きとなる君がため歌がるた  
寒怒濤鉄条網の先は基地  
路地を来る漁師ことばや水仙花  
七草やすなはち妻の誕生日  
旧姓に教へ子と知る初電話  
寒木瓜や朝より重き雲現れて  
森漏るる杣の灯ひとつ枯木星  
探梅の心許なきひとりかな  
身に浴びぬ枯野の匂ひ日のにほひ  
枯野道川に沿ひてはまた離れ

# 甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は  
次号は末尾になり以下同じ）

## 雪

田中臥石

流木を焚きゐて待てり初日の出  
てのひらに包めり初日海の上  
書き初は悼意の署名熨斗袋  
ふるさとと違ふ雪降り凍りけり  
洗濯へ喪服また出す寒椿  
雪熄みてをり黒白こくひやくの海の町  
雪道や着物の袖を搔き抱き  
東京の雪解けず靴滑りけり  
薺摘む背中へどんと海の音  
大寒や賀状の当り切手受く

## 野水仙

松田泰子

枯葉鳴る明日もこの道歩けるや  
冬深しひとつの疲れのみならず  
笹子鳴く神のふところ深くして  
枯蔓の纏れしままに焚かれけり  
貨車短か前も後も枯野にて  
野水仙夕日に村の沈もりぬ  
借りて着る雪のマントを貰められて  
寒の水飲める少女の白き咽喉  
なに祈るべきこの冬の満月に  
日脚伸ぶほんの僅かと言ふなかれ



# 乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は  
次号は末尾になり以下同じ）  
太字は推薦句

寒 晴 菅野 蒔子

着ぶくれて己の所作を疑ひぬ  
濯ぎ物部屋干しにして風邪籠  
診察のこたへは加齢霏々と雪  
年移る加齢の二字に憑かれみて  
初空やへリコプターの低く過ぐ  
羽子板と歌留多をならべ一人住み  
寒晴や丸き背を伸し行く

初 暦 城戸 緑

呪文めく鱒の競り声年の暮  
賀状書く京都の宛名長かりし  
日の丸を風の押しあぐ初景色  
検診日あまた書き込み初暦  
神鶏の砂浴ぶ背冬日差  
寄せ植糸の金の耀ふ福寿草  
一と草も摘まざる椀の七日粥





雪 晴 熊切光子

あらたまの月影しるし大櫓  
初鐘やあかり映るふ格天井  
実千両水琴窟の音冴えて  
林中の日差しに浮いて冬の蝶  
山繭のさみどり映ゆる四温かな  
雪晴や人を怖れぬ石たたき  
雪しんと眠れぬ夜の闇深し

除夜の鐘 堺 昌子

みどり児を見詰むる親族冬ぬくし  
かもしかの木の間隠れや湯治宿  
黒豆の艶よく煮えて除夜の鐘  
裸木の空の碧さを深めけり  
オブジェめきビルそれぞれの冬夕焼  
墨をたし和のひと文字を筆始  
初孫の成人式や背くらべ

冬 薔薇 鈴木一三

葉牡丹の渦の固きを買戻る  
小鷺来て羽根休めをり枯蓮田  
限りなき空の碧さや冬薔薇  
しきたりの薄れゆく世や飾売り  
父祖よりの味受継げり雑煮椀  
鮎鱈の仏頂面のさらさるる  
賜はりて重宝したりちやんちやんこ

初日の出 西川みほ

私語聞え夜廻りの主悟りけり  
露天湯より仰ぐ星座や去年今年  
刻々と波に茜や初日の出  
無人駅灯る行く手の寒さかな  
連れ舞ひて朝日を浴ぶるゆりかもめ  
初夢のちぐはぐとなる目覚かな  
恙なきこと祝ぐのみの七日粥

# 青炎集

## 小川玉泉選



横浜 高橋 明

横浜 原 久栄

日の丸を揚ぐる三始の家二軒  
神鈴を鳴らし初日を散らしけり  
くべ足せる梅のしきりに爆するなり  
寒林を行くや独りの音たてて  
はらり巻く紅きマフラー老の伊達  
**負け独楽のことりと元の彩となり**

冬霧を分け行くバイクいかり肩  
あまねしや冬三日月の光あり  
**笑みかくる遺影を拭ひ年納む**  
竹馬の少年囃す姉妹  
蓬菜のかをる樽酒竹杓  
床上げや庭にまばゆき福寿草

横浜 庵原 敏典

横浜 中野 久雄

**雪かぶる風見の鶏や阪神忌**  
大潮の波ひたひたと浮寝鳥  
冬霧のうすれ港の動き初む  
外つ国の名人り献灯淑気満つ  
年新た異国の船の遠汽笛  
シリウスの輝き増して寒に入る

くつきりと富岳浮かべり霜の朝  
大年の雲鴉色に日の沈む  
竹林のそよりともせず寒の入  
**炎立ち爆せて響めくどんだかな**  
梅早し日の斑を撒ける女坂  
川底の魚影舁めく春隣

登米 高橋美恵

年賀状水仙の絵の食み出して  
寒朝月未だ寝静まる里の人  
吊されし凍大根の細りけり  
**氷柱伸ぶ伸び行く先の滴かな**  
風花の視野幻想を生みにけり  
屋根に乗る雪の布団の厚さかな

横浜 熊切修

耳つけて櫛の息吹を冬帽子  
**北の風こめて塩鮭とどきけり**  
店外の人のたむろや大晦日  
ペランダの雑巾凍てて曲りたる  
石垣の石の湿りや冬の草  
大寒や大池に鯉動かざり

横浜 戸田澄子

初風の空の青さをひろげけり  
**大寒や遊具は子等を待つさまに**  
初雪に望郷つのる一ト日かな  
寒の雨しづかに雪を溶かしをり  
白寿てふ寒木瓜白き花つけぬ  
独りの餉黄味ふたつなる寒卵

横浜 中山良子

**富士近き本宮の空淑気満つ**  
枯木越し湖面に写る逆さ富士  
氷結の精進湖釣りの小舟出づ  
当てなくも外出日和や冬の鴝  
編み進むごと松の枝の雪帽子  
古民家の集まり易き囲炉裏端

横浜 斉藤マキ子

蓋うらに番の鶴や雑煮椀  
幸せのあふるるくせ字賀状くる  
一心に祈るをみなや初あかり  
**ふはり浮く紙飛行機や初御空**  
ひねもすの風収まりて寒北斗  
人影を雪のかき消す句座帰り

横浜 鶴見董子

初富士や走者に風の容赦なく  
走者待つ箱根駅伝衿寒し  
枯野原日矢の差したるひとところ  
七草や佃の路地の醬の香  
弁天のきざはし険し今朝の春  
**歌留多会祖母の貫禄しめしけり**

# 耕 土 集

## 松本三千夫選



江戸刷毛は我家の歴史障子貼る 横浜 中村 月代  
魴鱈の大見得を切る板の上

路線バス乗継ぎ乗越し冬麗

さはやかに老いてゆきたし冬の月

濡れ縁に小鳥来てゐる雪の朝

手仕事にひとり居忘れ冬ごもり

若き日の夢色褪せぬ古毛糸

街の色消して降り積む雪の花

穢れなき雪の富嶽の裾遠く

メモ記しくらし預くる新曆

冬風や大島どんとそこに在り

別荘の新整然と冬日影

風花に弄ばれて峠越ゆ

雪の夜の帳に沈む尾灯かな

薄氷を舐むる仔犬の毛ばだてり

山口 郁子

東大和 谷口 律子

早々と灯のつき冬の無人駅

晴れの日は雪のにはひの仄かなり

寒波くる欠航の札揺れてをり

軒先の雪を落してより屋根へ

雪卸終へて掘り出す厨かな

初夢や電子辞書より句のこぼれ

田作りに加へしナツツ歯につまり

しんしんと雪降る後の騒がしく

ベランダの白反射して客蒲団

幾何学の枯木模様の影を踏む

夕さりの町の其処此処落葉掻

敷きつめて目映ゆき銀杏落葉かな

冬日影池の整備の捗らず

柔道の湯のわくやうや寒稽古

買物や妻と二人の年の暮

横浜 新倉ゆき江

行川 秀雄

新潟 太田チエ子